

## C. 教員の教育・研究指導能力の向上のための方策

### ③教育効果・成果についての検証と教育プログラムを改善するシステムの構築

#### ●東京工業大学 生命理工学研究科生物プロセス専攻

##### 「国際的な理工系バイオリダーの育成」の事例 <理工農系>

###### 具体的に何を実施したのか

大学院生や教員による授業評価や海外大学や日本企業からの外部評価委員の評価を検証し、次年度の教育プログラム改善を実施した。

###### 実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと

- ・学生の意見を多く集めるため、各講義評価は無記名とした。
- ・教員による評価においては、教員全員参加での意見交換の機会を設け、様々な課題を共有した上での議論を行った。
- ・外部評価委員には、年1回評価会議を開催し、外部からの客観的な意見を数多く反映できるようにした。

###### どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか

この取組みにより、多くの講義についての大学院生の満足度が年々上昇した。従来の教育上の問題が再認識され、それらについて多くの教員で議論するようになった。

#### ●総合研究大学院大学 物理科学研究科機能分子科学専攻

##### 「研究力と適性を磨くコース別教育プログラム」の事例 <理工農系>

###### 具体的に何を実施したのか

本事業プログラムの運営について議論し、進捗状況を点検する運営委員会を月例定例として開催した。研究科内の各専攻から複数名が委員として出席し、TV会議システムで会合を行った。

###### 実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと

本研究科では基盤研究機関が地理的に分散しているため、委員会を対面で頻繁に持つことが困難である。そのため、TV会議システムを有効利用し、毎月定例の会議を持った。会議ではプログラムの運営が計画通りに進捗しているか、また改善を要する点はあるか、一つ一つの事業項目に対して常に点検しつつ運営を進めた。研究科の専攻長会議も同様な形態で開催しているが、それとは別日程でこの会議を設定し、教育プログラムの詳細に至る点まで詳細に議論できるよう配慮した。

**どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか**

会議を相当頻度で開催することで、特に地理的にも離れた専攻を超えた教員間のコミュニケーションが、以前に比べてはるかに良くとられるようになった。研究科全体の教育に関して共通認識が圧倒的に進み、研究科全体の教育面の運営、教育科目の体系化（共通専門基礎科目、英語科目等）などが整理され、統一感が増す結果を生んだ。